

兵庫県立須磨友が丘高等学校 総合学科推進部
令和7年度 第5号 3/19

第27回 兵庫県総合学科高等学校研究発表会「ひょうご五国総合学科サミット」開催

令和8年1月30日(金)、神戸文化ホールにて、第27回兵庫県総合学科高等学校研究発表会が開催され、本校からは3年次の代表生徒3名が参加しました。本発表会は、県内の総合学科17校が集まり、各校の取組の成果を共有するとともに、地域を越えた総合学科生徒および教員の交流を通して視野を広げ、絆を深めることを目的として実施されています。成果発表会の部では、岡崎志穂さんが「要支援・要介護度を下げる方法」と題して発表を行い、審査員特別賞を受賞しました。また、玉川心音さん、玉利帆夏さんは、本校の特色紹介として「クロスカリキュラム探究と実学探究を通じた学び」について発表しました。

<生徒感想>

- ・須磨友が丘高校にない総合学科ならではの授業や取り組みを知ることができた。発表には様々な工夫があり、失敗の原因を分析して次に生かす姿勢が見られた。失敗で終わらせず改善につなげる点が印象に残り、これからの将来に生かしていきたいと思った。
- ・友が丘以外の高校の研究活動を見る機会がこれまでなかったため、どの発表も新鮮で、多くの学びがあった。また、地域の人々と関わったり、行政に許可を取って研究を進めたりするなど、自分の研究では行わなかった取り組みを知ること、自身の研究を振り返る良い機会となった。

令和7年度 第24回総合学科発表会 開催

令和8年1月24日(土)、第24回総合学科発表会を開催しました。当日は、「産業社会と人間」や「課題研究」でお世話になった企業・大学・地域関係者の皆様をはじめ、神戸市内の中学校から30名を超える中学生にもご来校いただきました。

全体会では、1年次「産業社会と人間」の学びの発表、2年次「課題研究Ⅰ」の体験発表、3年次「課題研究Ⅱ」の代表発表が行われ、三年間を通じた探究の成果が披露されました。さらに、クロスカリキュラム探究や課題研究のポスターセッション、各教科の成果展示、海外語学研修の発表など、本校ならではの多様な学びが校内各会場に広がりました。

ポスターセッションでは、2年次生全員が自らの問いに基づく研究を発表し、来場者との質疑応答を通して研究をさらに深めました。発表する生徒は、自身の学びを言葉にすることで自信や達成感を得るとともに、聴く生徒にとっても「自分の研究をより深めたい」「次年度の課題研究が楽しみ」といった前向きな意欲につながる一日でした。発表会は、生徒一人一人の成長を感じられるとともに、本校総合学科の学びの広がりや三年間の歩みを確かめる場となりました。

<生徒感想>

- ・自分が今までできなかったようなことを沢山挑戦して成功することができたので、自分の殻を破れた感じがしました。とてもいい経験になりました。(2年)
- ・課研の発表の際に教授の方にも聞いていただいて、いろんな鋭い質問をさせていただいて、改善していく部分を理解することができました。(2年)
- ・総合学科だからこそ、このような意義のある発表を聞いたりしたりすることができるのだと実感した。自分の意見を言うことや、問いを深められることは今後生きていく上で大切だと学んだ1日だった。(1年)
- ・自分で仮説を立てて調べ、体験し学んで他者に伝える。また他者の調べたことや考えたこと、自分で調べるには時間のかかる多くの情報を一度の機会でもっとも知ることができる総合学科ならではの経験が積み重なったと感じた。来年度も自分で考えながら今年以上に発見のあるものにしていきたい。(1年)

<来場者感想>

- ・総合的な探究の授業での学びを通して、生徒達が自ら研究を進め、自分なりの答えを見つけている姿を見ることができ、素晴らしい取り組みだと思いました。専門的な視点を取り入れた授業での学びが、生徒が社会に出たとき、より生かされていくであろうと感じ、将来が楽しみです。(企業・大学・地域関係者)
- ・活発な探究活動がなされていること、総合学科としての学びがよく現れた発表会でした。1年生、2年生が次年度にさらに活躍されることを期待します。(企業・大学・地域関係者)



2月6日（金）、静岡県立駿河総合高等学校とのオンライン交流会を実施しました。駿河総合高校では防災に関する探究活動が行われており、本校でも「産業社会と人間」のクロスカリキュラム探究の中で防災をテーマとした学習に取り組んでいることから、その成果を発表し合う交流の場として開催されました。

本校の生徒たちはいくつかの班に分かれ、クロスカリキュラム探究で学んだ知識や経験をパワーポイントにまとめ、防災に関するさまざまなテーマについて発表しました。発表後には互いに質問や感想を伝え合う場面もあり、画面越しながらも活発な交流が行われました。学校外の生徒と学びを共有する機会は、生徒たちにとって大変貴重な経験となりました。他校の探究内容や発表の工夫に触れることで、新たな視点や気づきを得る良い機会となり、今後の探究活動への意欲も高まった様子でした。

<生徒の感想>

- ・初めて他の県の方と交流し、とても緊張しました。今回の交流会を通して避難生活にはたくさんの視点からの課題があると気がつきました。交流することで考え方を広げてアドバイスし合い、次につなげることができると思いました。
- ・この交流会に参加したことは、とても意味のあるものになったと思えました。自分たちがクロスカリキュラムで学んだ防災を誰かに伝える場があることにとても感謝しているし、交流をして新しい知識を得ることができました。
- ・チームで準備をするときから楽しさを感じて、発表もすごく楽しくすることができました。



2分間スピーチ（1年次）

2月6日（金）、1学次生の「産業社会と人間」の授業において、「2分間スピーチ」が行われました。生徒たちは、この一年間で学んだことや気づきを振り返り、2分間にまとめて発表しました。スピーチの内容は多岐にわたり、成長した点を振り返る生徒もいれば、新たに気づいた自分の課題を率直に語る生徒もいました。それぞれが自分自身と向き合い、この一年の学びを言葉にすることで、さらに理解を深める機会となりました。また、友人の発表を聞くことがいい刺激になり、改めて自分の目標に向かっていく決意が固まった生徒もいたようです。

<生徒の感想より>

- ・クラスの人のお話を聞くことで、自分自身の新たな気づきを得る機会となり、また学習に対する姿勢や夢への情熱が語れるとてもいい機会になった。
- ・クラスの人がどのような目標を持っているのか、これからの高校生活の過ごし方や人生像などを知るよい機会となりました。
- ・普段あまり話をしない人の夢を知ることができて楽しかったし、みんなの前で宣言することでこれまで以上に頑張れると思うのでとてもいい時間でした。



「with… 若き女性美術作家の生涯」鑑賞会（1年次）

3月5日（木）、「産業社会と人間」の授業において、映画監督の榎葉健さんをお招きし、ドキュメンタリー映画「with… 若き女性美術作家の生涯」を鑑賞しました。本作品は、本校卒業生である佐野由美さんの生き方をテーマにした作品です。

映画では、佐野さんが阪神・淡路大震災を経験したことをきっかけに、自分の進むべき道を模索しながら、美術作家としての道を歩んでいく姿が描かれていました。生徒たちは真剣な表情で映画を鑑賞し、佐野さんが自分の思いと向き合いながら表現を追い求めていく姿に、強く引き込まれている様子でした。映画鑑賞後には、榎葉監督による講演会も行われました。映画制作の背景や撮影時のエピソード、さらに作品完成後の佐野さんの歩みについてもお話しいただき、生徒たちはうなずきながら話を聞いたり、メモを取ったりする姿が見られました。

今回の鑑賞と講演を通して、生徒たちは佐野さんの生き方や考え方に触れ、自分自身の将来や生き方について改めて考える良い機会となりました。

<生徒の感想>

- ・私自身、佐野さんのようにたくさんの人から愛されることはきっとないと思う。しかし、周りの人に少しでも愛されるような人生を送りたいと願う。そして、自分自身が生きてよかったと思える日を迎えたい。
- ・自分で描いた絵を通して、ネパールの人たちとつながるきっかけになったり、佐野さんの絵でたくさんの方が心を動かされたと感じました。
- ・文化や言葉が違っていても、絵を描くことで人と人がつながることができるということをこの作品を通して感じました。
- ・自分の好きなことを「役に立たない」と決めつけるのではなく、そこから立ち直って自分の好きなことを極め続けるというのがものすごく大切なことなのではないかと思った。



キャリア講演会（1年次）

3月10日（火）、1学次生の「産業社会と人間」の授業において、一般社団法人イドミィ代表理事の高橋惇さんをお招きし、キャリアプランに関する講演会を実施しました。講演では、「一歩ふみだすことの大切さ」をテーマに、ご自身の経験をもとに、これからのキャリアを考える上で大切なことについてお話しいただきました。特に、自転車で日本一周をされた体験や、その旅の中で生まれた多くの出会いについてのエピソードは、生徒たちにとって印象深い内容となりました。ユーモアを交えながら語られる高橋さんの言葉に、生徒たちは真剣に耳を傾けていました。講演後の休み時間には、高橋さんのもとへ質問に行く生徒の姿も見られ、今回の講演が生徒たちにとって大きな刺激となったことがうかがえました。

自分のやりたいことに挑戦し続ける高橋さんの姿勢は、生徒たちにとって大きな学びとなったようです。今回の講演を通して、生徒たちが自分自身の将来について考え、将来に向けて一歩を踏み出すきっかけになることを期待しています。

<生徒の感想>

- ・惇ちゃんは、自分の思うままに今しかできないことに挑戦していて輝いて見えた。そんな惇ちゃんでも失敗があり、だからこそ今があるのだと知り、失敗を恐れずに挑戦していきたいと思った。
- ・一歩を踏み出すことで、「経験」「知恵」「人との出会い」の3つを得ることができると知って、自分も勇気を出して一歩を踏み出していこうと思えた。
- ・今回の講演で、「思う」「動く」「言う」ことによってチャンスが来ること。一歩を踏み出すことによって視野が広がることがわかりました。失敗を恐れずに、今しかできないことを、人目を気にせず全力で楽しく取り組んでいきたいと思えました。



課題研究 外部での研究発表会（2年次）

【甲南大学 ResearchFesta2025】12月21日（日）

甲南大学にて開催された「ResearchFesta2025」に、本校から清水葵さんと山口紗耶さんが出場しました。近年、新型コロナウイルスの影響でオンライン開催が続いていた本大会ですが、今回は待望の「全面対面開催」となりました。物理的な距離を超え、会場に並ぶ無数のポスターと、全国から集まった中高生・大学生・大学院生・先生方（参加者 436 名、発表件数 109 件）の熱気に包まれた空間は、生徒たちにとって格別の刺激となったようです。

<生徒の感想>

- ・今回、カラコンの色やデザインが与える印象について研究発表を行いました。発表の最後に、今後の展望として国籍別での調査を行いたいと述べたところ、質疑応答でジェンダーやルッキズムとの関連について助言をいただきました。このことから、印象の違いは文化的背景だけでなく、社会的価値観とも深く結びついている可能性があると感じました。
- ・たくさんのポスターがあった中で写真やグラフなどまとめられていてぱっと目を引くものが印象に残っています。発表をきいていると、下向いて話しているよりも聴衆の顔を見ながら話している方がとても伝わりました。私は今回原稿を読みながら発表しましたが、もっと聞いている人の顔を見ながら発表できれば感情と共に伝わると思いました。



【探究の共創 in Winter2025】12月21日（日）

東京学芸大学にて開催された「探究の共創 in Winter 2025」に、本校から上野紗来さん、小村優芽さん、新谷美羽さん、高木莉歩さん、田中由莉さん、福田柊斗さんの6名が参加しました。全国から約 250 名が集い、AI 時代に求められる「自ら問いを立て、価値を創出する姿勢」を共に考える場となりました。第1部では、92 件のポスターが集結したセッションが行われました。完成した成果を競うのではなく、問いが生まれた背景や探究の「過程」を、立場を超えて共有し、対話を通して互いの研究を深め合いました。第2部では、「探究 2.0」をテーマとしたワークショップが行われ、自身の探究が社会とどう繋がり、どのような価値を創り出せるかについて、模造紙や付箋を用いて議論を交わしました。

<生徒の感想>

- ・今回、外部発表に参加してとても有意義な時間を過ごせたと思います。ポスター発表では、様々な学校の先生に発表を見てもらい、アドバイスをもらうことで、新たな視点や発想を得ることができました。また、ワークショップでは「探究 2.0 とは何か」という問いに、他の県の高中生や講師の方と共に、意見を出し合い、一つの答えにまとめるという経験ができました。
- ・他校の発表は視点や研究方法が多様で、自分の研究を見直す良い機会になりました。発表するのは緊張しましたが、青森県の高中生と先生が研究内容を褒めてくれたので、大きな自信になりました。



【SERENDIPITY — SHIZUOKA TANKYU COLLECION】1月12日（月祝）

静岡県コンベンションアーツセンターで開催された、三菱みらい育成財団主催の「SHIZUOKA TANKYU COLLECION」に、本校から家田涼那さん、小山田美優さん、河合陽斗さん、児山智樹さん、鈴木彩太さん、真鍋迅さん、溝井亮太さんの7名が参加しました。この発表会は探究成果の発表や開発商品の披露にとどまらず、小学生から大人までが楽しめる「探究縁日」や文化祭のようなイベントを通じて、他校生や地域社会と深く「つながる」ことを重視しています。発表会では溝井さんが代表としてステージで発表を行い、大学の先生方からたくさんのコメントを頂きました。加えて、発表会が始まる前の午前中に地元の駿河総合高校で防災の探究をしている生徒と、交流会を行いました。

<生徒の感想（駿河総合高校との交流会）>

- ・駿河総合高校との交流会で感じたことは、社会に貢献する取り組みがすごいということです。僕の研究は自分がやりたいこと、調べたいことを研究しているのに駿河総合高校の生徒は「地域の人にどう防災について教えればよいかについて」「野菜嫌いの人でも美味しく食べられるようにする活動」など、他人のための取り組みが多かったです。

<生徒の感想（SHIZUOKA TANKYU COLLECTION）>

- ・他県の学生や大人と一対一で話すことは、滅多にないのでとても良い経験になりました。実際に商品を作って販売したり、運動に参加したり、起業をするなど大規模な取り組みを聞いて驚きました。実際に発表をし、緊張しましたが、自分が伝えたいことを伝えられたと思います。いただいたアドバイスを生かして、今後も挑戦したいです。



【第18回サイエンスフェア in 兵庫】1月25日（日）

ポートアイランドにある神戸大学統合研究拠点などの複数の研究施設において「第18回サイエンスフェア in 兵庫」が開催され、本校2年の西堂瑠偉さんが課題研究の取り組みをポスターで発表しました。兵庫県内のSSH校（16校）に加わり、質疑応答を経験し、今後の研究のデータ整理・分析に関する深い知見が得られました。大学院生のサイエンスカフェ「理系進路と大学生活」もあり、情報科学の最先端を目の当たりにする一日となりました。

<生徒の感想>

- ・SSHの学校が中心の発表会らしく、高度な専門知識を持った先生方・他校生徒からたくさんの意見を頂き、校内での発表では得られない新しい視点が得られて良い経験になりました。今後の制作の方針を決める参考になりました。

【令和7年度兵庫県高等学校探究活動研究会】2月11日（水祝）

ポートアイランドの神戸国際会議場において「令和7年度兵庫県高等学校探究活動研究会」が開催され、本校2年次の柏木蓮成さん、溝井亮太さんが参加しました。兵庫県内で80校以上が参加する最大級の発表の場で、スライド発表とポスター発表を行いました。今回の発表を糧にさらに研究をブラッシュアップして欲しいと思います。

<生徒の感想>

- ・発表後の質疑応答で、今まで気づけなかった「天候とカサゴの食性の関係」についての視点を気づかされて勉強になりました。他校生徒は自分が知らない分野の発表があり、工業高校のポン菓子制作なども見ることができ、世界が広がりました。



【マイプロジェクトアワード 2025 地域 Summit オンライン】12月20日（土）

12月20日（土）を皮切りに、NPO法人カタリバが主催する「マイプロジェクトアワード 2025」のオンライン Summit が開催されました。本校2年の石井瑞希さん、内野陽菜子さん、大瀨莉子さん、國貞梢さん、柴田芽依さん、安永光織さん、渡菜桜さんの7名が書類選考を勝ち取り、課題研究で取り組んできた自身の課題研究について口頭発表を行いました。サポーターや他校生との質疑応答を通じ、学校外の多様な視点に触れる貴重な機会となりました。専門家や大学生からの率直な意見・指摘を受け、自分たちでは気づけなかった研究の強みや具体的な改善点を明確にすることができました。

<生徒の感想>

- ・司会者（サポーター）の方がみんなで学んでいく共創の場と教えてくれたのでそこから安心して発表できました。他の人の発表を聞くと、留学をした経験を課題研究に生かしたり、ブランドを立ち上げて活動している人達があり、そんな中に自分がいて不安に感じたけれど、どの研究でも自分で課題を見つけられていて、私もこのマイプロジェクトを通して自分なりの課題を見つけることができました。

総合学科での学びをふり返って（3年次）

総合学科は「産業社会と人間」をはじめとする実践的・体験的な学習形態と「総合的な探究の時間」などの課題解決型学習があり、入学から卒業まで、これらを通して『自らの在り方や生き方に関わる学び』を進めました。これまで須磨友が丘通信で各年次での取り組みや成果発表の様子を発信してきました。今回は、3年間の学びから生徒たちが実感した思いやふり返りを紹介します。

【生徒のふり返り】

- 私はこれからのキャリアを自分がしたいことがあればすぐに行動して色々なことをする人生にしたいと考えています。カタリ場で自分について振り返ったときに、したいと思うことはあっても実際に行動することはほぼなく、思うだけで終わっていることに気づき後悔したこともあるので、これからは行動するようにしたいです。課題研究では自分が興味を持って知らないことを一から調べることの難しさや時間がかかるけど楽しいことを学びました。（有本悠大朗）
- 基礎力養成講座が一番今の自分のためにできていると思う。この講座ではグループワークの基礎を学んだ。まず、話し合いを円滑に進めるためには、最初に目的やゴールを全員で共有することが重要だと学んだ。また自分の意見を簡潔に伝え相手の意見を尊重しながら発言する姿勢の大切さを学び、さらに相手の話は最後まで聞き、要点を確認するなど、聞く力が話し合いの質を高めることも学んだ。私は大学のグループワークゼミ活動でとても役立つ力を身につけたと思っている。（東朔太郎）
- 私は、「産業社会と人間」の授業でこれからの人生に大きく役立つ様々な考え方を学びました。一つ目は、自分の進路についての考え方です。授業を受ける前まで私は、進路のことなど全く考えておらず、とりあえず大学に行けたらいいという気持ちで、勉強には一切目も向けず部活動とにかく打ち込んでいました。ですが、産業社会と人間での進路についての話を聞き、もう成り行きでどうにかなるところではないことに気がきました。この考えが、今勉強している理由につながったと思います。二つ目は、自立についての考え方です。今までの自分は、高校選びの際にも、友達がいくからここにするとといった考え方で、自分の考えを全く持てていませんでした。ですが、総合学科の授業で、これから社会人となる上で必要な自立について考えさせられました。これからの行動は、すべて自分で責任を持たなければならず、自分の考えを持って生きていく必要があることを痛感させられました。これからの人生では、総合学科で学んだ生き方について、しっかりと頭の中に入れながら自分の行動を改めて、望んだ道に進めるように努力していこうと思います。（小川裕真）
- 「働くとは」について考えたのが1番印象に残っており、1番深く考えることができたと思う。自分が今、ここまで生活できているのは、間違いなく親が必死に働いてくれているからだということを再確認できた。将来の自分について今のうちから考えておくことで自分の在り方を明確に想像することができる。実学探究では色々な問題について考えたので、自分の知識が広がった。また、グループワークで交流したことで自分にはなかった新しい考えに出会い、様々な考えを持つことにつながったと思う。（小谷司）
- 私は人と深く対話をしたり人前で発表したりすることに対して苦手意識があったが、総合学科で3年間学んだことで人とのコミュニケーションが得意になった。パワーポイントや模造紙を使った発表では、プレゼン力が身についた。回数を重ねたことや練習を繰り返したことで自信にもつながり、徐々に情報をよりわかりやすく整理し、質問に咄嗟に答えられる力を習得することができた。また、外部発表に挑戦したことで課題発見力も身についた。大勢の知らない人に向けて発表し、難しい質問や想定外の質問を受けたことで自分の考えを改め、研究の問題点を見つけた。さらに協力して課題に向かうなかで対話力も身についた。違うクラスの人と同じゼミで探究することで多くの人と対話し、新しい価値観にも出会った。社会で生きる上で対話は欠かすことのできないものであり自分の意思を述べた上で相手の意見を聞き、互いに対等な関係を築くことができると思う。（藤井優芽）
- 自分らしさについて考える実学探究が印象に残った理由は、答えが一つではなく、しかも正解を他人から与えられないテーマだったからです。まず、この探究では「自分らしさとは何か」「自分は何を大切にしているのか」といった問いを、自分自身に向ける必要がありました。普段の学習では、知識を覚えたり正解を導いたりすることが多い中で、自分の価値観や経験そのものが探究の材料になる点が新鮮で、強く印象に残りました。実学探究は、ただ調べて発表する学習ではなく自分で問いを立て、自分の言葉で考え、実際の社会や自分自身と向き合うという経験でした。正解が用意されていないからこそ、迷ったり悩んだりすることもあるけどその時間こそが一番の学びになりました。実学探究を通して分かるのは、成績や答えよりも、「自分は何を大切にしているのか」「何に違和感を覚えるのか」といった、自分自身の軸です。これは教科書では学ぶことができないし将来どんな道に進んでも必ず支えになると感じました。（渡邊優花）

全国総合学科卒業成績優秀者表彰	3年	呉 祐樹
兵庫県総合学科卒業生成績優秀者表彰	3年	岡崎 志穂
//	3年	玉川 心音
//	3年	玉利 帆夏



高大連携合同研究発表会（京都大学）



総合学科発表会



神戸市立横尾小学校とのNIE 小高連携授業

2月4日（水）、生徒会役員が神戸市立横尾小学校を訪問し、小学6年生を対象に新聞を活用した防災授業を行いました。はじめに、防災ジュニアリーダーとして宮城県を訪問した際に得た学びを報告しました。その後、阪神・淡路大震災や能登半島地震直後の新聞記事を教材として、災害時にどのような備えや行動が必要かを児童とともに考えました。

児童はグループに分かれて記事を読み取り、避難所での困りごとや必要な支援、取るべき対策について意見を出し合いました。最後は代表グループが話し合いの成果を発表し、学びを共有しました。高校生にとっても、小学生に伝える立場として授業を行うことで、防災や新聞報道の役割について改めて考える貴重な機会となりました。